

このピランデッロの二作品は、第一次大戦の最中と、終戦直後の混乱期に上演されて、一躍、彼を時代の最先端の劇作家へと押し上げたドラマです。

本邦初訳の『役割ごっこ』は、十九世紀の市民劇の形式に則りながら、それを極限にまで押し進めたグロテスク劇で、『作者を探す六人の登場人物』は、その市民劇の形式を完全に打破して、その後の二十世紀演劇への道を開いた記念すべき作品です。

ピランデッロの作品については、よく『狂気か、正気か』というキャッチフレーズが使われます。しかし、もし本物の狂気なら、われわれは理解できないはずで、むしろ、われわれ正常な人間——ただし、本当に正気かどうかは、ちょっと怪しいのですが——を、狂人に見えるほどに極端化したドラマであり、したがって幸いなことに、われわれはその狂気を完全に理解できます（もしできないとすれば、それは原意の無理解による誤訳のせいです）。

ピランデッロの登場人物たちは、同時代の他の劇作家たちと比べると、人工的で自然さや情感を欠いた人形のように見えることが多いと思います。でも、ある突発事件をきっかけに、突如、人間性の波がひたひたと押し寄せて、でく人形は急に血の通った生身の人間となり、彼らの口から、魂を焦がし、心を引き裂く言葉が発せられます。このようなドラマティックな瞬間こそ、ピランデッロ劇の真の醍醐味です。その深く人間的な感動の瞬間をじっくりと味わっていただきたいと思います。

読まれる際には、どうか予断なしに、そのまま本文を読み進んで下さい。ただし、時代背景やドラマの概要を頭に入れておきたい方は、同時に巻末の解説に目を通されることをお勧めします。

また、『六人の登場人物』の「序文」は、初演の四年後に、作品の制作動機やその内容を解説したピランデッロとその長男ステファノの長文の合作ですが、この難解な「序文」だけはすっ飛ばして、本文を読まれた後で、再びここに戻られることをお勧めします。

二〇二一年十月十日

訳者 斎藤泰弘